

研 究

6 か月児をもつ母親の精神状態に関する研究 (第3報)

— 子どもに対する感情および母親役割の受容との関連から —

山口 (久野) 孝子¹⁾, 堀田法子¹⁾

〔論文要旨〕

6 か月児をもつ母親の子どもに対する感情や母親役割の受容意識を明らかにし、精神状態との関連について分析を行った。子どもに対する感情は「子どもの成長への喜び」の得点が最も高く、母親役割の受容ではMP「積極的・肯定的受容」尺度得点の方が高かった。STAI, SDSと子どもに対する感情では有意な相関はなかったが、母親役割の受容のMP「積極的・肯定的受容」尺度は状態不安とSDSとの間に有意な負の相関を認め、とくに「母親になったことで人間的に成長できた」と関連があった。MN「消極的・否定的受容」尺度は状態不安との間に有意な正の相関を認め、とくに「自分は母親として不適格なのではないだろうか」と関連があった。

Key words: 6 か月児をもつ母親, STAI, SDS, 子どもに対する感情, 母親役割の受容

I. 緒 言

近年、育児期にある母親を対象とした研究が盛んに行われ、多くの母親が不安やストレスを抱えながら育児を行っている現状が明らかとなり、またそれらには多要因が複雑に関与していることがいわれている^{1)~4)}。戦後、女性の高学歴化、社会進出、晩婚化などの社会情勢にみられるように、女性自身の価値観や生き方、ライフスタイルの変化はめざましいものがある。一人の社会人であると同時に将来妻や母親となることが考えられる彼女らは、結婚・妊娠・出産・育児についてどのように考え、自分自身の人生・生活の中にどう位置づけているのであろうか。大日向⁵⁾は、母親は育児の意義は認めてはいるものの、育児以外に生きがいを求める意識が強いことを指摘している。

著者らは第1報⁶⁾で6 か月児をもつ母親の精神状態と育児ストレスとの関連について、また第2報⁷⁾では精神状態と性役割との関連について分析を行い、母親の精神状態およびそれに関連する要因について先行研究を支持する結果を得るとともに、新たにいくつかの有用な示唆を得ることができた。本研究は、さらに包括的な分析を行うため、6 か月児をもつ母親を対象に、子どもに対する感情や母親役割の受容意識を明らかにするとともに、両者の関係および母親の精神状態との関係について分析し、育児指導の参考とした。

II. 研究方法

1. 対象と調査方法

N市の保健所が主催する育児支援事業の参加者に調査の趣旨を説明し、同意が得られた50人

A Study on the Mental State of Mothers with 6-month-old Child (Part 3)

[1723]

~The Relationship among Their Anxiety, Depression, Feelings for Their Child and Reception of the Mother's Role~

受付 05. 4. 27

Takako YAMAGUCHI (KUNO), Noriko HOTTA

採用 05.10. 4

1) 名古屋市立大学看護学部 (研究職)

別刷請求先: 山口孝子 名古屋市立大学 看護学部 〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

Tel/Fax: 052-853-8058

の母親を対象に質問紙調査を行った。調査は乳児が6か月を迎える1週間前に母親に自記式の質問紙を郵送配布し、郵送により回収した。質問紙の回収数は39人(回収率78.0%)であった。

調査内容には、精神状態として日本版 State-Trait Anxiety Inventory (以下、STAI とする)⁸⁾、日本版 Self-rating Depression Scale (以下、SDS とする)⁹⁾を引用し、その他は、子どもに対する感情および母親役割の受容尺度⁵⁾、母親の年齢、父親(夫)の年齢、職業の有無、子どもの人数である(精神状態の測定用具は第1報⁶⁾参照)。子どもに対する感情は「母親が子どもを自分自身のどこに位置づけ、子どもに対していかなる距離をもって接しているか」を問うものであり、M1「子どもへの密着」4項目、M2「子どもへの献身」2項目、M3「子どもの人格性の意識」1項目、M4「子どもの独立性の意識」2項目、M5「子どもの成長への喜び」1項目、その他3項目からなる。また、母親役割の受容は「自分自身が母親であることをどのように受け止めているか」を問うものであり、MP「積極的・肯定的受容」6項目とMN「消極的・否定的受容」6項目から構成され、いずれも「違う」～「その通りである」の4段階評定で回答を求めた。なお、本調査においては子どもの年齢特性を考え、子どもに対する感情の質問項目を一部削除した。

本研究における調査期間は、平成13年7月～14年3月である。

2. 分析方法

各項目、各尺度を単純集計した後、STAI(状態不安、特性不安)、SDS、子どもに対する感情および母親役割の受容尺度との関連は Spearman の両側検定を行った。そのうち精神状態を表す尺度と母親役割の受容尺度との間に有意な関連がみられたものは、各項目について関連を検討した。

分析に先立ち、母親役割の受容の下位尺度の信頼性の検定を行ったところ、クロンバッハ α 係数はMP「積極的・肯定的受容」0.74、MN「消極的・否定的受容」0.68であった。なお、子どもに対する感情および母親役割の受容尺度への配点は、「違う」1点、「どちらかといえば違う」

2点、「どちらかといえばそうである」3点、「その通りである」4点とし、いずれの下位尺度も合計得点の平均を算出した。

統計処理はSPSS11.0 for Windowsを使用し、 $p<0.05$ をもって有意とした。

Ⅲ. 結 果

1. 対象の属性

対象の属性を表1に示す。母親の平均年齢は 29.3 ± 3.4 歳であり、父親(夫)の平均年齢は 31.1 ± 4.5 歳であった。また育児休業中の者も含め、現在職業をもっている者は38.5%であった。今回出産した児以外に子どもがいる者は20.5%であり、いずれも1人であった。

2. 子どもに対する感情(M1～M5, その他)および母親役割の受容(MP, MN)項目の平均得点

子どもに対する感情(M1～M5, その他)および母親役割の受容(MP, MN)項目の平均得点を表2に示す。子どもに対する感情は、「子どもがどんどん成長して一人前になっていくことは嬉しいことである」、「親の期待や思惑にとらわれず、のびのびした人生を子どもに送らせたい」、「わが子といえども、自分の思いどおりにいかないことも多いものだと思う」の順に得点が高かった。

表1 対象の属性

n=39

変 数	カテゴリー	分 布
母親の年齢		平均 29.3 ± 3.4 歳
	20～24歳	5人(12.8%)
	25～29歳	12人(30.8%)
	30～34歳	20人(51.3%)
	35歳以上	2人(5.1%)
父親(夫)の年齢		平均 31.1 ± 4.5 歳
	22～24歳	3人(7.7%)
	25～29歳	11人(28.2%)
	30～34歳	18人(46.2%)
	35歳以上	7人(17.9%)
母親の職業	有 ^{*1)}	15人(38.5%)
	無	24人(61.5%)
子どもの人数 ^{*2)}	0人	31人(79.5%)
	1人	8人(20.5%)

*1) 育児休業中も含む

*2) 今回出産した児以外の子どもの人数

表2 子どもに対する感情 (M1～M5, その他) および母親役割の受容 (MP, MN) 項目の平均得点

n=38

尺度	下位尺度	項 目	平均得点±標準偏差
子どもに対する感情	M1「子どもへの密着」	子どもが親元を離れていくことは、親として寂しいことである	3.21±0.81
		子どもは自分の体の一部のように思う	2.18±0.93
		いつまでもあどけなく子どもっぽくいてほしい	2.26±0.86
		母親としてふるまっているときがいちばん自分らしいと思う	2.61±0.68
	M2「子どもへの献身」	子どものためなら、たいていのことは我慢できる	3.34±0.63
		子どものためなら、どんなことでもするつもりでいる	3.29±0.57
	M3「子どもの人格性の意識」	子どもをみていると、自分が産んだ子というよりは別の一人の人間という感じがする	1.71±0.96
	M4「子どもの独立性の意識」	わが子といえども、自分の思いどおりにいかないことも多いものだと思う	3.53±0.56
		親が子どものためにと思ってすることが、本当に子どものためになっているか疑問である	2.92±0.75
	M5「子どもの成長への喜び」	子どもがどんどん成長して一人前になっていくことは嬉しいことである	3.76±0.43
母親役割の受容	その他	子どものために自分が何をしてやれるかを考えることは楽しい	3.34±0.53
		母親の自分がいちばん良いと思う教育を子どもに与えたい	2.68±0.53
		親の期待や思惑にとらわれず、のびのびした人生を子どもに送らせたい	3.66±0.53
	MP「積極的・肯定的受容」	母親であることが好きである	3.55±0.65
		母親になったことで人間的に成長できた	3.45±0.56
		母親としてふるまっているときがいちばん自分らしいと思う	2.61±0.68
		母親であることに生きがいを感じている	3.08±0.85
		母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた	2.84±0.68
		母親であることに充実感を感じる	3.45±0.65
	MN「消極的・否定的受容」	子どもを育てることが負担に感じられる	1.63±0.71
		育児に携わっているあいだに、世の中からとり残されていくように思う	2.29±1.09
		自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる	2.32±0.74
		自分は母親として不適格なのではないだろうか	1.76±0.63
		子どもを産まないほうが良かった	1.08±0.27
		母親であるために自分の行動がかなり制限されている	3.08±0.75

また、母親役割の受容のうち、MP「積極的・肯定的受容」項目で得点が高かったものは「母親であることが好きである」、「母親になったことで人間的に成長できた」、「母親であることに充実感を感じる」であった。MN「消極的・否定的受容」項目では「母親であるために自分の

行動がかなり制限されている」、「自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」、「育児に携わっているあいだに、世の中からとり残されていくように思う」の得点が高かった。

3. 子どもに対する感情 (M1~M5), 母親役割の受容(MP, MN)の尺度得点

子どもに対する感情 (M1~M5), 母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点を表3に示す。子どもに対する感情の5つの下位尺度はM5「子どもの成長への喜び」, M2「子どもへの献身」, M4「子どもの独立性の意識」, M1「子どもへの密着」, M3「子どもの人格性の意識」の順に得点が高かった。また, 母親役割の受容ではMN「消極的・否定的受容」尺度得点より, MP「積極的・肯定的受容」尺度得点の方が高かった。

今回は, 対象の属性と子どもに対する感情および母親役割の受容との間に有意な関連は認められなかった。

4. 子どもに対する感情 (M1~M5) と母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点間の関連

子どもに対する感情 (M1~M5) と母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点間の関連を表4に示す。MP「積極的・肯定的受容」尺度は, M1「子どもへの密着」 ($r=0.60, p<0.01$),

表3 子どもに対する感情 (M1~M5), 母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点

		n=38
尺 度	平均得点±標準偏差	
M1「子どもへの密着」	2.6±0.5	
M2「子どもへの献身」	3.3±0.5	
M3「子どもの人格性の意識」	1.7±1.0	
M4「子どもの独立性の意識」	3.2±0.4	
M5「子どもの成長への喜び」	3.8±0.4	
MP「積極的・肯定的受容」	3.2±0.4	
MN「消極的・否定的受容」	2.0±0.5	

表4 子どもに対する感情 (M1~M5) と母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点間の関連

尺 度	M1「子どもへの密着」	M2「子どもへの献身」	M3「子どもの人格性の意識」	M4「子どもの独立性の意識」	M5「子どもの成長への喜び」
MP「積極的・肯定的受容」	0.60**	0.35*	-0.07	-0.37*	0.01
MN「消極的・否定的受容」	-0.30	-0.35*	0.07	0.17	0.03

Spearman の相関係数
有意確率は両側検定による

*; $p<0.05$, **; $p<0.01$

M2「子どもへの献身」 ($r=0.35, p<0.05$) と有意な正の相関を認め, M4「子どもの独立性への意識」 ($r=-0.37, p<0.05$) とは有意な負の相関が認められた。すなわち, 母親役割を積極的・肯定的に受容している者ほど子どもに密着したり, 献身的に関わり, 子どもの独立性の意識は低かった。また, MN「消極的・否定的受容」尺度はM2「子どもへの献身」 ($r=-0.35, p<0.05$) と有意な負の相関が認められた。これは, 母親役割を消極的・否定的に受容している者ほど献身的に子どもに関わっていないことを意味する。

5. STAI, SDS と子どもに対する感情 (M1~M5), 母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点間の関連

STAI, SDS と子どもに対する感情 (M1~M5), 母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点間の関連を表5に示す。精神状態を示す指標であるSTAI, SDS と子どもに対する感情は, いずれの尺度得点とも有意な相関は認められなかった。母親役割の受容のMP「積極的・肯定的受容」尺度は, 状態不安 ($r=-0.41, p<0.05$) とSDS ($r=-0.39, p<0.05$) との間に有意な負の相関が認められ, 母親役割を積極的・肯定的に受容している者ほど状態不安, 抑うつが弱かった。また, MN「消極的・否定的受容」尺度は状態不安 ($r=0.38, p<0.05$) との間に有意な正の相関を認め, 母親役割を消極的・否定的に感じている者ほど状態不安が強かった。

6. STAI, SDS と母親役割の受容 (MP, MN) の各項目との関連

結果5 (表5) で精神状態の尺度と有意な関連が認められた母親役割の受容 (MP, MN) 尺度について, さらに具体的な質問項目との関係

表5 STAI, SDS と子どもに対する感情 (M1~M5), 母親役割の受容 (MP, MN) の尺度得点間の関連

尺 度	状態不安	特性不安	SDS
M1「子どもへの密着」	-0.07	0.15	-0.10
M2「子どもへの献身」	-0.16	-0.17	-0.15
M3「子どもの人格性の意識」	0.10	0.18	0.19
M4「子どもの独立性の意識」	0.18	0.22	0.18
M5「子どもの成長への喜び」	0.06	-0.10	-0.17
MP「積極的・肯定的受容」	-0.41*	-0.20	-0.39*
MN「消極的・否定的受容」	0.38*	0.28	0.30

Spearman の相関係数 *; $p < 0.05$
有意確率は両側検定による

を分析した。

表6-1に示すように, MP「積極的・肯定的受容」項目の中で状態不安($r = -0.54$, $p < 0.01$), SDS ($r = -0.44$, $p < 0.01$) と有意な負の相関が認められた項目は, 「母親になったことで人間的に成長できた」であり, 母親になったことで人間的に成長できたと思っている者ほど状態不安, 抑うつが弱いことが示された。

また, 表6-2に示すように, MN「消極的・否定的受容」項目の中で状態不安($r = 0.49$, $p < 0.01$) と有意な正の相関が認められた項目は, 「自分は母親として不適格なのではないだろうか」であり, 自分は母親として不適格なのではないだろうかと思っている者ほど状態不安が強いことが明らかとなった。

IV. 考 察

1. 子どもに対する感情の特徴

大日向⁵⁾が子どもに対する感情を測定した尺度は, 幼稚園・保育園児から高校生を対象としたものであったが, 本研究は生後6か月児に行うことから不適切と判断される項目が若干みられた。したがって, それらを削除した上で調査を行ったため, 大日向の結果と厳密に比較検討することは困難と考えられる。今回は本対象と

表6-1 状態不安, SDSとMP「積極的・肯定的受容」の各項目との関連

項 目	状態不安	SDS
母親であることが好きである	-0.23	-0.31
母親になったことで人間的に成長できた	-0.54**	-0.44**
母親としてふるまっているときがいちばん自分らしいと思う	-0.24	-0.25
母親であることに生きがいを感じている	-0.28	-0.21
母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた	-0.29	-0.12
母親であることに充実感を感じる	-0.12	-0.27

Spearman の相関係数 **; $p < 0.01$
有意確率は両側検定による

表6-2 状態不安とMN「消極的・否定的受容」の各項目との関連

項 目	状態不安
子どもを育てることが負担に感じられる	0.25
育児に携わっているあいだに, 世の中からとり残されていくように思う	0.28
自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる	0.06
自分は母親として不適格なのではないだろうか	0.49**
子どもを産まないほうが良かった	0.09
母親であるために自分の行動がかなり制限されている	0.09

Spearman の相関係数 **; $p < 0.01$
有意確率は両側検定による

最も年齢に近い幼稚園・保育園児の母親の回答を参考にしてみると, 両研究ともにM5「子どもの成長への喜び」の得点が最も高く, ほぼ同値であった。既報⁵⁾において, M5「子どもの成長への喜び」は母親の学歴や就業形態などの属性や子どもの人数, 出生順位に関わらず常に最上位にあり, 母親が子どもに対して抱く感情として普遍的なものであると報告されている。本研究からも子どもの年齢について関係なく上位

であることが示された。

その他の感情では、とくにM2「子どもへの献身」とM3「子どもの人格性の意識」に得点差がみられた。M2「子どもへの献身」については、6か月児は幼児に比べて、まだことばや行動で自己表現することが少ないため、母親は自己の感情を比較的コントロールできることから、得点が高くなったと考えられる。また、M3「子どもの人格性の意識」においても、6か月児は自我が芽生える前の段階であり、母親は自分とは異なる人格をさほど意識しないため、幼児をもつ母親より低くなったと推測される。これらより、子どもに対する感情は6か月児をもつ母親も幼児をもつ母親も大差は認められなかった。ただし、M2「子どもへの献身」とM3「子どもの人格性の意識」については、子どもの発達特性が影響したものと考えられる。

2. 母親役割の受容の特徴

母親役割の受容に関する先行研究をみてみると、大日向⁵⁾の園児の母親を対象とした調査では、MP「積極的・肯定的受容」尺度得点±標準偏差は 3.1 ± 0.6 点、MN「消極的・否定的受容」尺度は 1.9 ± 0.6 点であった。坂原¹⁰⁾の4か月児の母親を対象にした調査では、それぞれ 3.1 ± 0.5 点、 2.1 ± 0.5 点であり、18か月児の母親では 2.8 ± 0.5 点、 2.2 ± 0.5 点であった。したがって、6か月児の母親は、4か月児、18か月児、園児の母親より積極的・肯定的に母親役割を受容していたといえる。一方、消極的・否定的な意識については、4か月児、18か月児の母親より低く、園児の母親よりわずかに高かったがほぼ同値であった。このように、6か月児をもつ母親は他の月齢の母親より母親役割を積極的・肯定的に受容しており、母親としての自分に充実感を抱き、そのような自分を比較的抵抗なく受け入れていたことを示唆した。この現象の背後には、子どもの年齢がまだ低くとくに母乳育児等母親の世話や保護を必要とするため、できる限りわが子に接してあげたいという思いが関与していると考えられる。しかし、「母親としてふるまっているときがいちばん自分らしいと思う」という意識が大日向⁵⁾同様最下位であったことは、母親であることが自分のすべて

とは思っていないことが本対象からも窺われた。

MN「消極的・否定的受容」項目では、「母親であるために自分の行動がかなり制限されている」、「育児に携わっているあいだに、世の中からとり残されていくように思う」、「自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」と強く感じていた。6か月児は幼児に比べて、子どもと一緒に過ごす時間が長いこと、自分の時間がほとんどなく焦りを強く感じていると考えられる。菅原¹¹⁾は、1998年に就学前の子どもをもつ母親を対象に実施された経済企画庁の調査で、「自分のやりたいことができなくてあせる」という問に対し、「よくある」、「ときどきある」を合わせ有職者69.5%、専業主婦74.0%が回答したことを報告した。大日向⁵⁾も自分自身の生活への欲求と育児との間に葛藤が生じたとき、世の中から取り残されることへの焦燥感や行動が制限されているという意識をもつと指摘している。また、この傾向は高学歴の者ほど顕著であった点⁵⁾から、今後は母親の学歴や宮中^{12)~17)}の夫婦関係等の要因も視野に入れて検討を行いたい。一方、「子どもを産まないほうが良かった」と回答した者は既報⁵⁾同様わずかであり、子どもを出産し、母親自身の生活が充実できるように家庭環境の改善等助言をすることも必要と考える。

3. 子どもに対する感情と母親役割の受容との関連性

出産後6か月では、母親役割を積極的・肯定的に受容している者ほど子どもへ密着したり、献身的に関わりようとしており、また子どもの独立性への意識は低かった。これは、6か月児では幼児期以降の子どもに比べ反応が複雑ではなく、子どもの要求一つひとつに振り回されずに済むことが多いこと、母親であることを積極的・肯定的に受け止めている者ほど思いどおりに行き、育児に疑問を感じていないと考えられる。

また、母親役割を消極的・否定的に受容している者ほど献身的に子どもに関わりようとはしないという結果が得られ、この時期は密着や献身という姿勢が必要であるが、自分自身の生活に焦りを感じていたり、育児を負担に思っている

者ほど子どもと深く関われないことが示された。高澤ら¹⁶⁾の乳児の母親の調査でも、育児消極群は母親としての意識が希薄で、子どもと距離をとる育児態度が明らかとなった。一方、幼児期以降の子どもをもつ母親は、MN「消極的・否定的受容」尺度はM1「子どもへの密着」と有意な正の相関を示し、M2「子どもへの献身」においても正の関係にあった。このことについて、大日向⁵⁾は消極的・否定的意識とは母親であることそれ自体への嫌悪や子どもの存在の否定ではなく、むしろ、育児に専念することから生じる行動上の制約や世の中からとり残されることに対する焦燥感が主な内容であると述べた。幼児期は自我の芽生えや基本的生活習慣の自立の時期であり、母親が子どもと密着化しようとしても子どもは反抗や抵抗することから、母親は育児に対し自責の念を抱き、母親役割を消極的・否定的に感じるとも考察することができる。

4. 精神状態と子どもに対する感情および母親役割の受容との関連性

精神状態を示す指標である STAI, SDS と子どもに対する感情は、いずれも有意な相関は確認されなかったが、どちらかといえば子どもへの密着化を示す尺度のほとんどにおいて負の関係がみられた。これは、わが子とよく関わり、一体化しようという密着化の感情が強い者ほど不安や抑うつは弱いことがいえる。また、子どもの自立を促し客観的な関わりを志向する尺度のうち、M3「子どもの人格性の意識」やM4「子どもの独立性の意識」は正の関係にあったことから、自分の思いどおりにはいかないことが多く、わが子を別の人間であるという客観的な感情が強い者ほど不安や抑うつは強い傾向にあった。さらに、M5「子どもの成長への喜び」はどちらかといえば負の関係にあり、わが子の成長を喜ぶ感情が強い者ほど不安や抑うつは弱い傾向にあった。これらより、6か月児をもつ母親においては、子どもに客観的に関わろうとする感情より、密着化しわが子の成長を喜ぶ感情を強くもつことができる者ほど精神状態は良好であることが窺われた。

母親役割の受容尺度との関連では、母親役割

を積極的・肯定的に受容している者ほど状態不安、抑うつが弱く、母親役割を消極的・否定的に受容している者ほど状態不安が強かった。宮中¹²⁾も10か月児をもつ母親の調査で、母親意識が高い群は抑うつが弱いことを指摘した。一方、藤本ら¹⁸⁾は幼稚園児の母親の調査で、状態不安が一般成人女性より少し高くても子どもを十分に受容し、育児を促進する可能性があることを報告した。そのため、今後は状態不安の程度と母親役割の受容との関連性、および両者の因果関係についても検討していく必要がある。

さらに、精神状態の尺度と有意な関連があった母親役割の受容項目との検討では、「母親になったことで人間的に成長できた」という意識が強い者ほど状態不安や抑うつが弱かった。これより、とくに育児に従事していることを自分自身の成長・発達にプラスであると理性的に解釈できることが状態不安や抑うつの精神状態の安定に大きく関与していることが示唆された。また「自分は母親として不適格なのではないだろうか」という意識が強い者ほど状態不安が強かったことから、育児や自分自身に自信を失うことが状態不安の上昇・悪化に関与していた。川井ら¹⁹⁾は、0歳児をもつ母親の育児困難感には「育児に自信がもてない」、「母親として不適格」、「子育てに困難を感じる」、「子どものことでどうして良いか分からない」など育児への自信のなさ、困惑とその結果として自分は母親として不適格と認知していることにあると指摘した。

今回の研究で主に注目した精神状態の指標である不安や抑うつと子どもに関する感情との間には有意な関連が認められなかったが、母親役割の受容意識との関連では、母親役割を積極的・肯定的に受容している者ほど状態不安、抑うつが弱く、とくに「母親になったことで人間的に成長できた」が精神状態に関係していた。また、母親役割を消極的・否定的に受容している者ほど状態不安が強くなり、とくに「自分は母親として不適格なのではないだろうか」が精神状態に関係していることが明らかとなった。したがって、6か月児をもつ母親の育児指導の際には、育児や自分自身に自信をもち、さらに育児をすることで母親自身も成長している、成長できたという意識がもてるような関わりが重要で

あり, そうすることで母親の精神状態を良好に保つことができると考える。

V. 研究の限界と今後の方向性

最後に本研究の対象は, 自ら育児支援事業に参加した者であり, 育児や自分自身に関心が高い集団といえる。また調査地域が限定されていること, 対象数が少ないことなどから, 調査地域や調査対象を増やし, 本研究の結果が一般化できるかを検討する必要がある。

今回は, 対象の属性と子どもに対する感情および母親役割の受容との間に有意な関連は認められなかったが, 大日向⁵⁾の研究では母親の学歴や就業形態などとの関連が報告されており, 今後はこれらの背景要因をも調査し, 精神状態, 子どもに対する感情や母親役割の受容意識との関連についてさらなる分析を行い, 効果的な育児指導・育児支援のあり方を検討していきたい。

謝 辞

本研究の趣旨をご理解いただき, ご協力くださった保健所の職員の皆様, 参加者の皆様に深く感謝します。

なお, 本論文の一部は日本小児看護学会第15回学術集会で報告した。

引用文献

- 1) 斉藤早香枝. 母親の育児ストレスの変化と被養育体験との関連. 北海道大学医療技術短期大学部紀要 1999; 12: 31-41.
- 2) 加藤道代, 津田千鶴. 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討. 小児保健研究 57(3); 1998: 433-440.
- 3) 坂間伊津美, 山崎喜比古, 川田智恵子. 育児ストレーンの規定要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌 1999; 46(4): 250-261.
- 4) 八幡裕一郎, 畑 栄一, 佐藤千枝子, 他. 育児不安に関する要因の検討. 日本公衆衛生雑誌 1999; 46(7): 521-531.
- 5) 大日向雅美. 母性の研究. 第5刷 東京: 川島書店, 1996.
- 6) 堀田法子, 山口孝子. 6か月児をもつ母親の精神状態に関する研究(第1報) 不安, 抑うつと育児ストレスとの関連から. 小児保健研究 2005; 64(1): 3-10.
- 7) 山口孝子, 堀田法子. 6か月児をもつ母親の精神状態に関する研究(第2報) 性役割と精神状態との関連から. 小児保健研究 2005; 64(1): 11-17.
- 8) 水口公信, 下仲順子, 中里克治. 日本版STAI使用手引, 三京房.
- 9) 福田一彦, 小林重雄. 日本版SDS使用手引, 三京房.
- 10) 坂原純子, 桑名佳代子, 桑名行雄, 他. 乳幼児期における母親役割受容に対する意識と関連要因. 母性衛生 2001; 42(3): 255.
- 11) 菅原千代子. 育児不安研究の動向. 聖マリアンナ医学研究誌 2003; 3: 107-113.
- 12) 宮中文子. 「母親への発達」に影響する父親および家族の要因—出産後10カ月の調査による分析—. 母性衛生 2001; 42(4): 677-685.
- 13) 島田三恵子, 神谷整子, 筑後幸恵, 他. 育児不安の事例から見た産後の母親援助. 母性衛生 1997; 38(4): 343-349.
- 14) 松岡治子, 花沢成一. 青年期の親性としての母性度・父性度の発達. 母性衛生 1999; 40(3): 271.
- 15) 桑名佳代子, 桑名行雄, 坂上明子, 他. 乳児期における母親役割認知と役割受容. 母性衛生 2000; 41(3): 148.
- 16) 高澤みゆき, 松井浩子, 井上果子. 母親の育児意識とわが子に対する感情—面接調査の結果から—. 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要 2002; 創刊: 57-76.
- 17) 佐藤幸子, 遠藤恵子, 三澤寿美. 育児困難感と母親の人間の発達の関連. 日本看護科学学会学術集会講演集 2002; 22: 408.
- 18) 藤本昌樹, 小堀友子, 鈴木国威, 他. 母親の不安と養育態度, 子ども観に関する共分散構造モデル. 小児保健研究 2003; 62(3): 359-364.
- 19) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅳ. 日本子ども家庭総合研究所紀要 1998; 34: 93-111.